

2021. 8. 15. 主日礼拝説教  
聖書：ルカによる福音書4章1-13節  
『誘惑は手をかえ品をかえ』

主イエスはバプテスマのヨハネから洗礼を受け、いざこれから神の子としての生涯に入ろうとされた時、40日間何も食わず荒野を引き回され悪魔の誘惑に遭われました。まず悪魔は「神の子ならこの石にパンになるように命じたらどうだ」と言いました。すると主イエスは申命記8;3の「人はパンだけで生きるものではない」との言葉を引用してそその誘惑に勝たれました。第二の誘惑は、全ての国の権力と繁栄をあげようというものでした。主イエスは申命記6;13の「あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ」との言葉を引用して拒否されました。第三の誘惑は、高い所から飛び降りても天使が支えてくれるから試してみろというものでした。主イエスは申命記6;16の「あなたの神である主を試してはならない」との言葉を引用してこの誘惑にも勝たれました。

この誘惑物語は人生の縮図のようなものです。第一の誘惑は30歳まで。石をパンにするような力を身につけて、有能な人間、難問を解決出来る人間になりたいと願います。解決しなければならないと思う課題は「物」です。第二の誘惑は30～60歳の間に味わいます。権力とか繁栄です。大なり小なり権力の座につくためなら多少の不正にも妥協し、すすんで協力さえします。10代や20代の時には、そんな大人の行為が不潔に思えても、自分がその年代になれば平気でやっています。自分の地位や生活、家族を守るためなら妥協すべきだと思っています。これが悪魔を拝むことです。第三の誘惑は60歳を越えてから味わいます。第一線で仕事をしていた時は神さまなぞ生活の中に顔も出してきません。しかし、体力も衰え、多くの不安が顔をのぞかせてくると神様が問題になってきます。けれども神の前に打ち砕かれるわけではありませんので、神にさえ指図します。「こうあるべきだ」「神がいるならこうするはずだ」と。神を上にも据えず、自分を神の上に据えて評論するのです。

旧約のサムエル記には、幼いサムエルが仕えていた祭司エリが自分の息子達の悪い行いを制止できない姿が登場しますが、やはりサムエルも年老いて

自分の息子達が悪いことをすると訴えられても、訴えた人たちのほうが悪いと  
考えたと記されています。

このように人の罪に気がついても自分の罪には気がつかないのが人間です。  
人のことなら「なぜあのような誘惑に負けて」と思えても、自分がその立場にな  
ると判断が弱くなるのです。70歳になれば70歳の誘惑に遭い、80歳になれば  
80歳の誘惑に遭うのです。パウロもローマの信徒への手紙3;10で「正しい  
者はいない。一人もいない。」と言っていますが、みんな誘惑にさらされ、それ  
を誘惑とさえ気付かずに生きていることが多いのです。

しかし、わたしたちは心強い。なぜなら、主イエスも同じ誘惑に遭われたから  
です。そして、そのことはわたしたちの弱さを知ってくださるということなの  
です。しかも、主イエスはみ言葉によって誘惑に打ち勝たれたのです。「み言葉  
にはあなたがたを救う力がある」(使徒言行録20;32)とありますが、わたしたち  
にもみ言葉が与えられているのです。み言葉によって誘惑は啓示ともなります。  
人生は死ぬまで誘惑の連続なのでしょう。しかし、そのことがキリストの十字架  
の恵みをいっそう明らかに示し続けているのです。